

いのちいっぱい 感動いっぱい ~ ありがとうの旅を続けよう! ~

明日は1学期終業式です。プレハブ校舎の解体から始まった4月でしたが、5月には、2年間続いた校内のすべての工事関係作業が終了し、やっと落ち着いて活動が行えるようになった学期でした。今学期の教育活動は、わずか3か月半でしたが、この間、本当に多くの感動や感謝があり、言葉では表現しきれないほど充実した濃い学期だったと感じています。大きい行事はなくとも、日々の感動が、子ども力、学校の力、人の力のすばらしさを感じさせてくれました。1学期間、本当にありがとうございました。

絶対、最後まで泳ぎ切りなさい!

3年生以上がほぼ全員参加した水泳部の練習は、1か月間の練習を終えて6月30日で終了しました。その後は、記録会に出場する選手の強化練習に入っていますが、水泳部に所属した子どもたちは、とてもよくがんばって技法の向上や記録会へ向けての気運を高めてくれました。

さて、その水泳部の練習目的の中に、「体力・技術・精神面の向上を図る」という文言があります。体力や技術は泳法に関することですからよく分かります。難しいのは、“精神面の向上”です。つまり、スポーツにおいて、体力や技術があっても、心がついてこない大きい成長にはつながらないということです。子どもたちにこの言葉で伝えたとしても、理解することは容易ではありません。

ある日、練習風景を見ていた私は、体育主任の繰り返し叫ぶ言葉にハッとしました。

「絶対、最後まで泳ぎ切りなさい!それだけはやりきりなさい!コース内で人にぶつかっても、絶対足を付いたらいけん!25mを泳ぎ切りなさい!」

ターン地点にいる友だちが進路をふさいでいても、もうこのくらいで足を付いてもいいだろうと思っても、スピードが落ちたとしても、設定したゴールを“泳ぎ切りなさい”と繰り返す体育主任。この言葉には、自分の目の前にある“目標”を、どんな形でもとにかく“やりきる”ことで、“自信”につながり、やがて“自分の心と判断力で挑戦しようとする心が芽生えてくる”という思いが含まれています。

“一度やると決めたことは、最後までやりなさい!”

私たち支援者の役目は、“やめさせることではなく”、“最後までやりきらせること”なのだと思います。

共に

子どもたちは、人としての温かい心からの支援の中で大きく成長します。本校には、特別支援学級が2クラスありますが、この1学期もそれぞれの子どもたちが、先生方の支援に支えられながら大きく大きく成長しています。支援員さんが記録される観察日記には、日々の子どもたちの成長やどう支えていくかなど、たくさんの“思い”が書かれてあり、どんな文書よりも、“学校とは”“教育とは”の答えをその中に見ることができます。

近年のICTやAIなどの進歩で、世の中は大きく変わろうとしています。私は目の前にいる子どもたちと先生方の生の声や笑いや涙を忘れたくはないと思います。

1組のAくんには、中岡先生に支援員として付いていただいています。最近の観察日記には、こんなことが書かれてあります。

“今日初めて「先生、ぼくね、うんち出てない。」と自分のことを言葉にして言えました。他にも「分かっとなる〜」「なんだって〜」などを、会話の中でよく使うようになりました。給食は落ち着いて食べて、片付けまできちんとすることができました。池にいる赤ちゃんメダカを見つけて、真理先生に「(赤ちゃんメダカを)助けてください。」と言って掃除に行きました。掃除は、愛美先生と3人で楽しくでき、1組に戻るまで落ち着いて行動できるようになりました。真理先生とAくんが、保中に行かれた後、すぐにメダカの水槽の掃除に取りかかることができました。「メダカごめんね〜」と言いながら、バケツに移したり、水槽を洗ったりすることができました。給食は食べられる物は少なく、「いや、食べない。」とトイレに行ってしまったが、戻ってきて「分からなかった〜」と涙をためて反省していました。「大丈夫。まだやり直せるよ!」と声を掛けて、牛乳・パンを完食できました。”

今学期のAくんの見事な成長ぶりに感動すると同時に、その成長を自分事として、喜びを持って支えて

いただいている中岡先生に感謝しています。そして、同じように、子どもと共に必死で毎日を支えていただいている5名の学校生活支援員の先生方に、心から感謝です。本当にありがとうございます。

大人の階段登る二人に

毎年行われる市内の中学生のジョブチャレンジ（職場体験学習）。喜須来小学校には、今年度も2名の2年生が5日間の体験に臨んでくれました。例年、卒業生以外のメンバーなのですが、今年度はなぜか卒業生。ですから、二人のことは大変良く分かっていました。

5日間という時間は、中学生にとっては、短くも長くも感じる時間ですが、3日目あたりから言葉や動きの中に、いろいろな変化が見えてきます。それは、中学生の“心の変化”と言ってもいいかもしれません（本人たちは、明確な変化は感じていないかもしれません）。しかも、これは見ている私たちの方が感じる“変化”と言ってもいいかもしれません。

さて、毎朝「今日もよろしくお祈いします。」と挨拶に来てくれた二人でしたが、最終日の朝、私は二人に課題を出しました。

「この五日間の体験を通して、今までの自分を見詰め直し、明日からの自分の生き方を見付けてほしい。君たちは、（これから）どう生きるか。その答えをください。」

あまりにも唐突な質問に、時間をおいてもう一度校長室へ質問に来た二人でしたが、必死に答えを探してくれました。放課後、二人は答えを持って、校長室に来てくれました。質問を真剣に受け止めて、一生懸命考えてくれたことが、二人の真っ黒になったノートを見て分かりました。

Aさんは、こんなことを言ってくれました。

「私は、三つのことを学びました。一つは、仕事は見えないところでたくさん大変なことがあるということです。私も小学生の時そうでしたが、子どもたちは6時間目で終わり、部活動などもして帰り大変でした。しかし、先生方は、それ以上に働いているということを知り、あらためて「働く」ということの意味を考えました。

二つ目は、クラスを一つにまとめるには、創意工夫をしなければならないということです。小学校では、クラスが一つにまとめることが大切だと感じました。そのためには、働いているということをしつかりと理解し、必ずしなければならないことはもちろん、子どものことを一番に考えて行動することが大切なんだと感じました。

三つ目は、子ども目線での教え方です。自分が分かっているから簡単に教えるのではなく、子どもたちにとっては新しいことばかりなので、その子にあった教え方を丁寧にしないと伝わらないということが分かりました。

この五日間を生かして、私は明日からの中学校生活で、次の二つのことを特に意識し活動していきます。

一つ目は、毎日の活動の中で、少しずつ学ばせていただいている立場の先生方に、日頃から感謝を伝えることです。それは、ふだんの授業前後のあいさつから一生懸命心を込めて行い、いろいろな場面で先生方に感謝を届けたいと思います。

二つ目は、だれに対しても平等に接することです。私は今まで、仲の良い友だちとはたくさん話してきましたが、あまり交流がない友だちとは、自分から話をするということはありませんでした。自分から少しずつ声を掛け、クラス全体の仲間の輪を広げていける人を目指したいと思います。」

また、Bくんは、「生活の中では、あいさつをすることはもちろん、その声の大きさが大切だということ。そして、この5日間の小さい子との関わりを通して、人と関わっていくということの大切さを学んだ。」と語ってくれました。

小学校時代には、とてもとてもこんな大人の話はできなかつた二人。しかし、1年も経つと、もうすでに大人の会話ができたということに驚きを感じました。そして、大人の階段を少しずつ登っていく若い力を信じたものだと感じたのです。二人の力には十分なれませんでした。よくがんばってくれた二人に、私なりの声援を贈り激励の言葉に代えたいと思います。

「今、君たちは、中学生という立場や考え方で毎日を過ごしていますね。毎日、君たちの目の前にいる先生方はいろいろな先生がいるけれど、どの先生も皆、君たち一人一人の人間性や生きる力を引き出そうとしてがんばってくれていることに感謝しましょう。そう考えられるようになると、きっと自分の動きが

変わってきます。目の前の学級担任の先生とどう今の環境（クラス）をつくっていかなければならないか見えてきます。自分の人生は自分の考える力で変えるのです。相手の立場に立って考えることで、人生は大きく前進するということに気付いた君たちは、ここへ来た意味があったと思います。少し大人に近づいた二人と“どう生きるか”について語れたことを幸せに思います。5日間、よくがんばりました。そして、これからもがんばれ！智樹、倫佳。」

ぼんぼん

安全の確保を理由に、入学からずっとお子さんと一緒に登校してもらっている保護者の皆さんがおられます。1年生は、入学から3か月が過ぎ、登下校を含めて学校の生活に随分慣れてきました。集団登校の様子を毎日見っていますが、もうそろそろ保護者の皆さんの支援なしで来られそうな子もいます。そのうちの一人Aくんは、6月下旬から少しずつ段階的に、保護者の同伴の軽減に挑戦しています。

ある朝、Aくんとお父様が、今日はここまでという場所に来たとき、お父様はAくんの肩に“ぼんぼん”と合図をされて、何か一言声を掛けられました。小さくうなづいたAくん。あ・うんの呼吸のもと、一つ一つ目標を親子でクリアしていく姿を見て、私も勇気付けられるのです。

突然のお別れ

「突然のことですみません。私、運転手をやめることになりまして、この学校には、今まで本当にお世話になりましたので、お礼とお別れに来させていただきました。」

6月のある朝、突然、裏門からお越しになった井上運送の運転手さん。毎日、子どもたちに確実に給食を届けてくださった運転手さんです。本当に突然のことで、驚いたのは私たち教員でした。やめられる理由は、健康上の理由だとお聞きしましたが、運転に支障が出たらいけないということで、息子さんのおられる大阪へ転居されるそうです。

ちょうど授業中でしたので、私たちができることは、職員室におられた先生方と、1年生の時からよく言葉を交わし、年度末には“ありがとうのお手紙”を渡してきてくれたAくんと、お礼の言葉を交わすことぐらいでした。Aくんは気持ちよく職員室前に下りてきてくれて、運転手さんに言葉を掛けてくれました。

「今まで、おいしい給食を運んでくれて、ありがとうございます。」

「こちらこそ、ありがとう。」

いつも運転手さんは、白い作業着を着て仕事をされていたのですが、その朝は黒い服を身に付けられていました。

「いつもと違う格好でマスク付けてないから、おっちゃんのことだれか分からなかったかもしれないね。」と言われました。すると、Aくんは

「今日は、僕と同じ色だね。だって、黒と黒だもん。」

と運転手さんに声を掛けました。この日、Aくんも黒い服を着ていたのです。運転手さんは、その言葉に、にこっと笑われながら、Aくんとさよならをしました。何気ない会話ですが、最後まで飾らない二人の会話に、私たちは気持ちが温くなりました。健康に気を付けられ、大阪での息子さんとの幸せな生活を祈りたいと思います。本当にありがとうございます。

私たちが知らないところで

学校は、多くの方々の支援で成り立っている。そして、守られている。そんなことを実感するときがあります。先日も、たまたま所用で外出した際、子どもたちの通学路の脇を車で通りました。その道は、ふだん子どもたちしか通らない路側帯ですが、最近、雑草がかなり伸び、子どもたちが歩く場所が徐々になくなっていっていました。私も草刈りをしなければと思いつつ、実行できていませんでした。

ところがその日、そのエリアを草刈り機できれいに刈っていただいている方のお姿を見ました。「あ、草刈りをしていただいている。」と思ったのですが、よく見ると、喜須来小にお孫さんがいらっしゃるおじいちゃんのお姿でした。車を止めてお礼を言うことができなかつたのですが、こうして私たちが知らないところで、多くの方々が、子どもたちの安全を守る支援をいただいていることに感謝の気持ちでいっぱいです。いつも本当にありがとうございます。